

真壁 仁 編

詩の中にめざめる日本



岩 波 新 書

610



真 壁 仁 編

詩の中にめざめる日本

岩 波 新 書

610

真壁 仁

1907年山形県に生まれる
1922年高等小学校卒業後1941年まで
農業に従う。その後山形県農産物
検査所技手、山形市千歳農業会専
務理事、山形市教育委員などを経
て、現在山形県国民教育研究所所
長。

著書—「黒川能」「人間茂吉 上下」
詩集「街の百姓」「青猪の歌」
「日本の湿った風土について」
編著「弾道下のくらし」「新し
い教師集団」「蔵王詩集」
「黒川能—農民の生活と芸術」

詩の中にめざめる日本

岩波新書(青版) 610

1966年10月20日 第1刷発行 ©

1972年5月10日 第8刷発行



編 者 真 壁 仁

東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発行者 岩 波 雄 二 郎

東京都新宿区改代町 24

印刷者 田 中 昭 三

発 行 所 東京都千代田区 一ツ橋 2-5-5 株式会社 岩 波 書 店

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

理想社印刷・田中製本

目次

民衆は詩人である——序にかえて——

八十六歳の情感

林 金太郎 △はつ日、五月晴と知人▽

21

行為できずく倫理・叡知

浜 口 国 雄 △便所掃除▽

24

台所一九五四年夏

石 垣 り ん △日記より▽

27

生のなかの生

森 春 樹 △音、指▽

30

生活のオノマトペ

山 田 今 次 △あめ▽

32

唄をつくる民衆

小 幡 周 太 郎 △出稼ぎの歌▽

34

幼い創造者

たかはしひろゆき △雨▽

36

親と子の愛と倫理

吉 野 弘 △父、星▽

38



山村の家屋構造

佐藤健一 〓煙出し 40

貧農の末路

井上俊夫 〓惣七家出一件 42

天平の愁いの顔

荻田あさの 〓阿修羅 44

農民への近親憎悪

黒田喜夫 〓空想のゲリラ 46

樺美智子追悼詩

高橋敬子 〓その朝、前進 49

充滿する死

沖田きみ子 〓死の花粉 52

農民詩人の一典型

伊藤和 〓すいか 54

獣と神とのあいだ

茨木のり子 〓大男のための子守唄 56

自分と他者への対話の方法

大江満雄 〓あの人たちの日本語を杖にも柱にもするな 58

傷みやすい少年の魂

渡辺照男 〓生活日記 60

父と子の会話

畠山義郎 〓まさひでもあぐら 63

暴風雨のなかの農婦のうた

怒りの証言

津軽方言詩と地方主義

現代詩のなかの童謡

あどけない冒険の季節

詠嘆と決意

エロスの誘い

反近代の思想

母性の眼のこまやかさ

痛烈な挫折感

権力への対決

木村 迪男 △おはんのうた▽ 66

八島 藤子 △私は広島を証言する▽ 70

高木 恭造 △冬の月、夜明け、百姓▽ 72

森崎 和江 △あたしゆめみた▽ 74

川越 綴子 △変化、無駄▽ 76

大関 松三郎 △虫けら▽ 78

滝口 雅子 △男について▽ 80

錦 米次郎 △根土▽ 82

高田 敏子 △ぶらんこ、橋▽ 84

千早 耿一郎 △並木についての伝説▽ 86

赤間 勝美 △瞳▽ 88



子どもの作像力

日本のカーペンター

諧謔による文明批判

新旧意識の葛藤

アウシュヴィッツへの怒り

閉ざされた坑口

平和への証言

北辺の種族の声

労働者の笑い

心象と実在のあいだ

阿武隈の星

石川 節夫 △巨人の先生▽ 90

三野 混沌 △やぶこうじ、雨▽ 92

有 馬 敲 △贖金つくり、ひげのソネット▽ 94

北 林 正 △牛を殺す▽ 96

野 田 寿子 △月経▽ 99

丹 野 茂 △硫黄▽ 102

峠 三 吉 △呼びかけ▽ 104

更 科 源 藏 △チャチャはこう話してくれた▽ 106

昭石川崎「暁塔」 △「大」浴場無情の歌▽ 109

高 橋 重 義 △庭▽ 112

猪 狩 満 直 △船、馬▽ 114



残虐の記録

押切順三 〓無人の村 〓 116

心の渇き、地の乾き

友田多喜雄 〓雨 〓 118

敗戦の記録

齋藤峻 〓枯れ葦 〓 120

学生とともに

西出新三郎 〓おふくろ、うしろ 〓 122

孤独と連帯

中野鈴子 〓なんと美しい夕焼けだろう 〓 124

若い魂の独白

後藤和子 〓石を積む 〓 126

人間のめざめ

菊地綾子 〓宗門御改帳 〓 128

虜囚の体験

長尾辰夫 〓悲劇 〓 130

おくりもの

土田茂範 〓車勇助 〓 132

自然とのたたかい

熊谷克治 〓太陽をとれ 〓 134

失った青春

中村正子 〓胸のそこの川原で 〓 137



闘病者の詩的体験

三十年周期の思考

街の主婦たちの詩

罪の意識にたつ

死者のこえ

予言

滅びのイメージ

最初の体験者たち

弾道の下に生きた十年

生活をくぐした認識

桑村 宏 △潜水艦とハンチング▽ 140

草野比佐男 △交替勧告、夢の成就▽ 142

にしおかつこ △問屋街▽ 144

竹本源治 △戦死せる教え児よ▽ 146

田辺利宏 △泥濘▽ 148

樺美智子 △最後に▽ 150

厚木 叡 △伝説▽ 152

岡本俊夫 △原爆体験記▽ 154

佐藤智子 △無題▽ 155

後藤勝一 △弾道下のうた▽ 156

横戸栄子 △屁▽ 158



農業技術者の夢

差別とのたたかい

嘘のない人間のあかし

望楼哨の眼

遊撃者の映像

出稼ぎと離農

アフリカの鼓動

民族の音いろ

詩をかく家族

村の心象風景

存在と愛

丸子 喜正 △原子力を農業生産に▽ 160

丸橋美智子 △みんな同じ人間なのだ▽ 162

村井安子 △チューインガム一つ▽ 164

本多利通 △雨あがりの昇天▽ 168

村津雅夫 △モウモウ団▽ 170

小坂太郎 △渡り鳥▽ 172

赤木三郎 △ギゼンガのはなし 河▽ 175

須田禎一 △唇を噛みしめる▽ 178

山田清勝 △小さな風、A2型▽ 180

佐藤義則 △黒い空間、黄昏の村▽ 182

長尾 登 △二つの森▽ 184



魂への訴え

土佐のいごっそう

歴史への信頼と厭世

地底の声

ゆきずりの愛

死の記録

ライオンと蛇

海上労働者の眼

思想としての竹

古い日本沖繩

あとがき
209

池田 ソメ △うめぼし▽ 186

西岡 寿美子 △砂から▽ 188

長沢 延子 △告白▽ 190

下原 温子 △部落誌▽ 192

磯村 英樹 △途中▽ 194

たむら まさみ △日本人の死▽ 196

薩川 益明 △自由について▽ 198

中原 厚 △黒い一匹の人魚の歌▽ 200

花田 克巳 △ベトナムの竹▽ 203

野里 竹松 △陳情口説▽ 206

民衆は詩人である

——序にかえて——

眞壁 仁

1 大衆から民衆へ

これは詩の本である。けれども日本の詩のすぐれた作品を選びとって、こんなにちりちり文学的な高さを示すような本ではない。明治以降評価のすでにさだまった名詩や、現代詩人のなかでもすぐれた個性を形成した詩人たちの作品を鑑賞するためには、ほかにいくらも詩華集がある。それによって、小説の作家などにくらべれば不当に低いあつかいをうけている詩人たちのしごとをただしく見なおしてみることが必要である。とりわけ詩人たちがあたらしい形式、方法、技術をもとめて多様な文学の未来をひらこうとしてきた努力や、ことばの機能を重層的にとらえて、くりかえしのない思想表現の様式をつくりだしてきたしごとは、文学史のなかにただしく評価され位置づけられる必要がある。時代の感情、歴史の現実というものにもっともするどい反応を示してきたのも詩人であったように思わ

れる。

しかしこの本におさめた詩は、それら選ばれた詩人のものではなく、名もない民衆（人民大衆）のなかの書き手の作品である。なかには詩人として一家をなしている人の詩もまじってはいるが、それもその作品が人民大衆の詩と基底をおなじくしているということである。仲間入りをしてもらったので、専門家と素人というわけかたはさして必要と考えなかった。

「名もない民衆」というよびかたをここでは慣用したが、それは有名でないことを意味するだけではない。それは人格をもった人間としての存在をみとめられなかったために姓名をもちえなかった頃から、むしろ名をかくすことで身をまもうと考えてきた大衆の存在様式をも意味しているのである。だから大衆がじぶんのことば、じぶんの表現をもち、それに署名しはじめた行為に注目しなければならない。詩を書いてそれに署名する大衆はもはや大衆でも「無名の常民」でもなく民衆であると考えたい。

人間の上半身は、より神に近く、下半身はより獣に近い。昼の光のなかで神に近い顔をして生きている者も、夜は灯を消し、裸になり、横たわって眠る。頭脳による創造の力も生産労働の力も獣とおなじその休息の姿態からよみがえる。人間は身体の上と下のどちらかの一方ではない。上と下の発達の不均衡ということはあっても断絶はない。それなのに大衆とは下等な下半身のことだという差別意識がいまでも根強くのこってはいはしないか。大衆は量にすぎず、量だから大衆だと考えるのは政治であるが、日本の知識階級も、選ば

れたものの意識で大衆を対象化しているとおもわれる。しかし「わざ」をもって物をうみだす手も下半身に属していたとすれば、上半身の方は頭が残るだけではないか。頭だけでは人間として不完全であることはいうまでもない。この分離は人間の本性に反し、力で人間を支配する権力者の作爲によって歴史的、社会的に生みだされてきたのである。

ホモ・サピエンス(理性人)として人間をとらえるのとえかたも、ホモ・ルーデンス(遊戯人)として人間をとらえるのとえかたも、全的ではないだろう。頭脳と身体の均等な発達、生産と遊びの統一ある生活を内容として、人間の能力の全面的な発達をめざす思想の自覚が今日はある。民衆の誕生も、そのことへのめざめであるといえるだろう。

2 民衆の創造力

民衆の創造能力を手ばなしで信頼していいとは思えない。しかし民衆は芸術や文化の受け手であってつくり手ではないなどとはいえない。民衆はつくりだしたい、表現したいという志向をつよくもっている。そしてつくりだし、表現する能力をも潜在的にもっている。つくり手と同時に、受け手が民衆のなかに共存していた未分化の時代が過去にはあった。分業による生産の発達に照応して創造の作業の専門化がすすむにつれ、民衆はもっぱら受け手にまわされ量としてあつかわれる。大衆を消費者として組織することで文化創造も企

業となる。民衆のなかのつくり手はしだいに萎縮し、工作のわざもほろんでいった。民衆が沈黙したのはいつのときも、外部の力におさえられたからである。

民衆が芸術や文化をみずから創りだそうとする動機は、生活をゆたかにし、たのしみたい、労働をさえたのしいものになりたいという人間的な慾求に根ざしていることはあきらかである。ホモ・ルーデンス論を説いたホイジンガは、詩作のなかにも遊戯機能を見出している。ゲルマン社会や古代アイスランドでは法律文をさえ詩の形で書いた時代があったし、詩が形象言語であるとすれば古代においてこそ、詩法の技術が、その厳格さと洗練度において高度の水準に達したのではないかといっている。たとえば舌のことを「話の棘トゲ」といい、大地を「風の広間の床」といい、風を「木の狼」といいあらわす婉曲代称法は、一種のなぞ解きの興趣につながっていると見る。その表現はむしろ暗喩の方法というべきであって、遊戯機能とホイジンガがみている要素こそ、物のイメージに観念を結合させる形象化の方法を意味している。「創造」のはたらきは、その遊びと見える表現の工夫の過程にひそんでいる。そして、観念を物と結びつけてとらえることがもつとも好きなのは民衆である。

民衆はことばの論理性がもっている硬直質と、ことばの科学性がおびる冷たさをあまりこのまないのである。ことばを通達的内包として考えるよりも、感化的コミュニケーションとしてうけとめたいのだ。その証拠として、民衆のつくりだした俗語には比喩のことば

が非常に多い。詩も本質的に比喩の表現を大切な機能としているのだから、俗語は日常生活の詩なのである。ことばというものを、意志や用件を伝達する手段とするだけでは足りず、これをおもしろくつかいたい、ことばを相手の判断に訴えるだけでなく、感動をもよびおこすものとして用いたいという文化的志向をもつのは専門の作家や詩人だけではないのである。

日常生活の詩である俗語にあらわれる比喩はしかし、美しいあらわしかたで美的な感動をつくりだすことにはあまりすまず、おもしろさで意味を包んでいくという傾向がつよかった。おもしろさはすぐ通俗化する。しかし「顔を貸せ」などというすばらしい暗喩をはじめてだれかが創出したときの得意さと思っても愉快である。「おれの顔に泥を塗ったな」と怒ったときには、ほんとうに顔が泥だらけで、目ばかりパチクリさせている男の顔の映像を重ねあわせて、さて塗られる「顔」などを持たない民衆は、暗喩がボスの用語にも盗用されるほど魅力があることに気づいたにちがいない。「腹を割って話そう」とか「足が出た」とか「しっぽをつかんだ」とかいう暗喩のことばは無数にある。それらは隠語とともに職人の社会や、農民漁民のあいだにつくりだされている。その大方は使いふるされ通俗化して、死んだ暗喩となってしまったのではあるが。

しかしたとえば農民のあいだで、遠方の田のことを「沖の田」あるいは単に「沖」と呼んでいる例がある。これは夏ならば青い槍葉の稲のそよぐ様子が青海原を想わせるし、秋

には黄いろに稔った穂波がやはり海の様相を示すことから、農民がもっとも注意を傾ける
ときの田の形象に漁村のことばを入れてきているのだ。これなどは俗語としての暗喩から
詩的な暗喩へとひろがる方向を示唆するもので、さがせばそれぞれの地域、さまざまの職
業階層のなかに発掘できるのではなからうか。

民衆がほんとうに詩人なのだと思うことがよくの例もないわけではない。私は
『文化の継承と創造』という一文でふれたことがあるので重複するがやはりここでとりあ
げておく。それは東北のある山村で採集したことばである。雪の多い山のなかのその村で
は二月の雪のことを「木の股裂き」といつていた。三月の雪のことを「花崩し」といい、
四月の雪は「べっき(蛙)かくし」というのである。これは完全な暗喩、詩的暗喩といつて
よいものである。表現になつていともいえる。むかしからのことばだから陰暦の月をさ
しているわけで二月といつても陽暦の三月とみていい。この三月はそろそろ雪が消えはじ
める季節だ。雪は地熱にえぐられて下から消える。桑の木や果樹が枝折れするのはこのと
きである。木の股に雪がまだ残っているのに、また新しい雪が降る。春先きの雪は湿つて
重い。音をたてて枝は折れる。「木の股裂き」とは、農民の生産活動のなかで受ける被害の
実感から生まれた。

陰暦の三月はまんさくが咲き、こぶしが咲き、ぼけの蕾がほぐれる。春をその手につか
んだと思つたのに、急に指のあいだから逃れるかのように、いち夜のうちに雪が降り積む。